全国国公立幼稚園・こども園
ＰＴＡ連絡協議会

会報

第62号
発　行　者
全国国公立幼稚園・こども園
ＰＴＡ連絡協議会
会長　　山　﨑　篤　史
事　務　局
岡山県倉敷市玉島阿賀崎1-2-31
玉島テレビ放送(株)内
印　　刷
株式会社玉島活版所

「不易流行と幼児教育とPTA活動」

全国国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ連絡協議会
会長　山　﨑　篤　史

いつも子どもたちを大切に想い、この会報を手に取っていただいております全ての皆様に、心から感謝を申し上げます。

世界的規模の感染症に翻弄された時期を過ぎ、各地で発生する災害から守るべきものをいかに守っていくかが社会課題とされている中、日々の生活とやらなければならないことに追われる日常の中で、子どもたちの笑顔に癒される日々だと想像します。

光陰矢の如しと言われますが、正に痛感する日々です。子育てや教育現場に身を置かれているPTAの仲間の皆様にとっても、やらなければならないことに追われる日々を過ごしながら、ふと過去を振り返った時、時間の流れの速さに驚かされていることと存じます。

この変化の激しい時代においても、変わってはならないものの一つとして教育の重要性が挙げられます。言わずもがなですが、国の礎を築く人材創出・育成に欠かせない要素である教育は、何にもまして尊重されるべき要素であると思います。しかしながら、教育という言葉の主たる部分に幼児教育が設定されているのか、現状において不安を感じています。当然ながら、身を置いている私たちはその重要性を固く信じ、必要な発言や要望をしかるべき機関にたいしお届けする活動をしています。その中で、幼児教育の重要性が行政の指針や予算に反映されているのかについては、不安な感情を持たざるを得ません。特に公の幼児教育については、現在の状況は、将来展望の示された過程なのではなく、他の分野の政策を実施した結果の影響なのではないかと感じるのです。

公立園の急激な減少という状況を目の当たりにすると、変わってはならないものが変わってしまっているのが、全国各地の幼児教育の現場なのではないのだろうかと考えてしまいます。

私たち、全国国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会は、全国の子どもたちの安全安心を守る保護者や教職員の先生方の日々の活動を通じて、日本の幼児教育を守り、全国の子どもたちの未来を守る活動をしています。国の安寧は、人財によると言われます。その人財は、教育によって育まれます。そして、子どもたちが初めて関わる教育が、幼児教育です。

いろいろな理由、状況はあろうかと思いますが、眼前のニーズに引っ張られすぎて、幼児教育の重要性を軽んじられては絶対にいけないと思います。幼児教育の発展充実を目指す活動が、その先にある社会課題の解決への一番の早道である気がするのは私だけではないと期待します。

社会が、私たちに何かをしてくれる（公助）という考え方ではなく、私たちが社会のために何ができるのか（共助）を考え実行していかなければならない時です。PTA活動の本旨は、個人的なメリットの追求ではなく、地域への貢献・未来への投資です。

不易流行。最初の教育である幼児教育の重要性を結果として変えることなく、PTA活動を通じて社会課題を解決に向かわせるという方向性を示していく。

幼児教育とPTA活動は、社会課題の解決に繋がる。

結びに、いつも子どもたちを大切に想い、この会報を手に取っていただいております全ての皆様に、多くの幸せと輝かしい未来が開かれますことを心から心から祈念申し上げます。

特別寄稿

「これからの幼児教育の課題と国公立幼稚園・こども園に期待すること」

文部科学省初等中等教育局　幼児教育課長　前田　幸宣

全国国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ連絡協議会の皆様におかれましては、全国の国公立幼稚園・こども園の幼児教育の推進に向けて、常日頃より多大な御支援と御協力を賜っており、心から感謝申し上げます。

この度、「全国国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ連絡協議会会報」の紙上をお借りして、これからの幼児教育の課題と、国公立幼稚園・こども園に期待することをお伝えできればと考えています。

さて、私は2016年から2019年の３年間、パリにある在外公館に赴任しており、当時小さかった息子と娘を現地の公立幼稚園に入園させました。息子は１年間を幼稚園、その後２年間を小学校で過ごしましたが、娘は３年間現地の幼稚園で教育を受けました。（※帰国後の半年は公立幼稚園でお世話になっています。）フランスは私が帰国した年の秋から義務教育化しましたが、当時の教育担当大臣が幼児教育を義務教育にした理由として、あらゆる分野の研究で人生の最初の７年間が大事であること、不平等の縮減、特に言語面での不平等を縮減したいこと、他者への尊重、共感、連帯感といった共和国的な価値観を重視したいこと、といった理由などを挙げています。

娘が帰国前の最後の登園をした際、担任の先生から「たとえ人と違っても、あなたの意見はあなただけのものである。日本に帰ってもそれを大事にしていきなさい」と言われましたが、自分の考えを大事にするからこそ、他者の意見にも耳を傾けることができる、つまりは「他者への尊重、共感、連帯感」につながっていく、そのことを伝えたかったのではないかと感じています。

幼児教育は令和の日本型学校教育の答申の中でもスタートラインに位置付けられています。幼児期に自立心の土台を形成することで、その後の小学校以降の学びを通じ、自分という一人の人間への自信と労りが育まれ、結果、多様性・包摂性を尊重する態度も身についていくのではないかと考えます。

幼稚園教育要領にある「学びに向かう力、人間性等」「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」の三つの資質能力が、義務教育以降の生活や学習に必要な基盤です。幼児教育と小学校教育を円滑に接続するために、幼保小が協働して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などを手掛かりとして架け橋期のカリキュラムを作成し、教育を充実させることが大切となります。

文部科学省としては、幼児期及び幼保小接続期の教育の質的向上を図るため、幼児教育と小学校教育との円滑な接続、いわゆる幼保小の架け橋プログラムの推進や、本年度から本格実施している幼児教育に関する大規模縦断調査、地域における幼児教育の質の向上を図るための幼児教育推進体制の活用・充実の支援などに取り組んでいるところです。

「架け橋プログラム」の実施は、地域が一体となって取り組む必要があります。行政、特に教育委員会の役割は重要であり、幼保小と連携・協働して推進していただきたいと考えています。また、地域全体の幼児教育の質の向上を図るため、幼児教育センターの設置や幼児教育アドバイザーの配置など、体制を充実させる仕組みづくりが必要です。教育委員会や幼児教育センターのほか、幼児教育アドバイザーなどの専門人材の指導を受けながら園内研修を実施していくことで、幼児教育の質の向上を図ることができます。

本年10月に取りまとめた「今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会」の最終報告では、特に公立幼稚園に期待される役割として、①地域の拠点園としての機能、②域内の小学校（タテ）と幼児教育施設等（ヨコ）をつなぐ結節点としての機能、③幼児教育アドバイザーなどの専門人材を育成する機能などが示されています。また、国立大学附属幼稚園については、先進的な実践研究や公開保育、指導資料の開発等を通じた広域でのネットワークの形成が期待されています。

こうした役割や機能も背景に、公教育の質の向上を図る基盤として、これまで長い歴史の中で培ってきた幼児教育を生かして、社会や地域のニーズに応えていけるようにしなくてはならないと考えています。

最後になりましたが、子どもが豊かに育つには、小さいときの経験が大切です。自分の可能性を信じることや求められる存在であることの自覚、主体的に進もうとする力の基礎を身に付ける場所が幼児教育だと考えています。国公立幼稚園・こども園が続けてきた教育研究、研究指定、公開保育など、地域の中核としての機能を果たせるよう、これからも引き続き取り組んでいただきたいと考えています。

第62回
全国国公立幼稚園・こども園PTA全国大会　香川大会

香川大会運営委員長　紫和　恵理子

令和6年8月2日、3日の2日間、香川県高松市にて「子どもの未来　語るけん！考えるけん！うどん県！」というテーマのもと、文部科学省をはじめ多数のご来賓をお迎えし「香川大会」が盛大に開催されました。全国各地よりご参加いただきました皆さま、ありがとうございました。また、無事に開催することができましたのも、山﨑会長をはじめ、役員や理事、事務局の皆さま、そして、香川県の園長会や保護者の皆さまのご協力があったからこそだと思っております。本当にありがとうございました。

全国大会だからと無理に背伸びをせず、今の私たちにできる範囲の大会に…ということで、執りかかったので、皆さんにご満足いただけるのか正直、内心不安でしかありませんでした。

当日を迎え、情報交流会と大会のオープニングではシンガーソングライターのmimikaさんが会場を盛り上げてくれ、また、記念講演では子どもが作る“弁当の日”提唱者の竹下和男先生にご講演いただきました。

また、案内や大会要項の表紙を「うどん県」らしいデザインにしたところ、お申し込みの際に「この案内を見たらうどんが食べたくなる」と、たくさんの方のお声をいただきました。（もちろん狙い通りです。）

参加された皆さま、香川でうどんは堪能できましたでしょうか。

ここ数年、コロナ禍でPTA活動も今までどおりにはいかず、このような大会運営も何から始めて、どうしたらいいのかわからないというメンバーが多いなか、今大会を経験させていただいた香川大会の実行委員のメンバーからは「人の繋がりの大切さ等もこの全国大会を通して改めて感じる事が出来ました。」「全国大会にかかわる中で、たくさんの方々に出会えたことや、色々なものの見方、考え方を知ることができたことは、自分自身の財産となりました」「全国大会成功！に向かってみなさんと団結できたこと、嬉しく思います。貴重な経験をさせていただき感謝の気持ちでいっぱいです。」という言葉をたくさんいただきました。今回の香川大会で、地元でこれからも頑張っていくPTA仲間たちにこのような経験をさせていただいたこと、本当に感謝しています。ありがとうございました。

記念講演

「台所でひらく　子どもの未来」

子どもが作る“弁当の日”提唱者

講師　**竹下　和男 氏**

私が校長として赴任した中学校では生徒数が800名を超えていました。校長室で私を蹴飛ばしたり、殴ったりするような生徒指導困難校でした。「顔は長いが、話は短い」それが赴任のあいさつでした。体育祭での私の挨拶は15秒。そういう形をとりながら、あなたたちと一緒に成長していくのが楽しくて仕様がないという教師集団ができると、絵に描いたように警察沙汰が起こらなくなりました。１日で45枚ガラスが割れたこともあります。しかし『弁当の日』を始めた翌年から１枚もガラスを割られないのです。それは私が異動した後も続きました。結局、私たちは生徒が悪いとか、親が悪いとか言っているけど、実は自分自身の方に向かせてないという思いがずっとありました。今、子どもたちが育ちにくい環境が日本中に広まっていますが、その責任は自分にあると思っています。私は命がけで授業をすれば子どもたちも必死になって聞いてくれるという環境を大人たちが見せるべきだという思いで取り組んできました。

私が講演に行った先では、講演のタイトルに弁当という言葉があるだけでPTAの人たちが集まってこないという現象。とても素敵な進学校の小学校でしたが、毎年200人は参加しますっていうPTAの研修会に、私が講演に行くと50人くらいしか集まっていないのです。しかし、私の講演を聞いた保護者たちが驚き、講演に参加しなかったすべての家庭を回って『弁当の日』実践校に変えました。やっぱり人は一生懸命になって動けば、変えていけるということです。

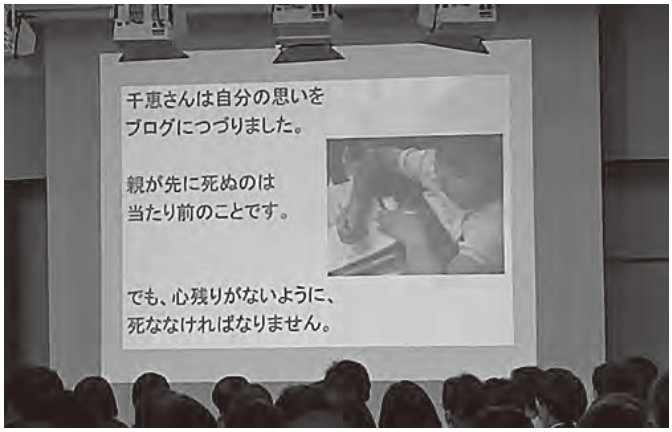
宮崎県は県で条例を作って小中学校に『弁当の日』をさせています。97％を超えて実践校になっているはずです。それは『弁当の日』が広がれば、離婚は減る、少年院に入る子どもの数が減る、児童虐待は減る、そういう信念の下に大人たちが一丸となって、子どもたちを育てることの重要さに取り組む姿を見せたいという思いで作ってくれました。それも私が『弁当の日』を経験した子どもたちが、間違いなく100年後の未来を今よりもよくしてくれるという信念と現実があることを伝え続けたからです。

『はなちゃんのみそ汁』という話は、私の話がきっかけで24時間テレビにでたり、絵本になったり、小説は安武信吾さん、お父さんが書きました。この話には食育が幼児期の教育にいかに大きな影響を与えるか、心理学や発達心理学、教育心理学、人類の歴史から…いろんな意味で大きな具体例として話がでてきます。

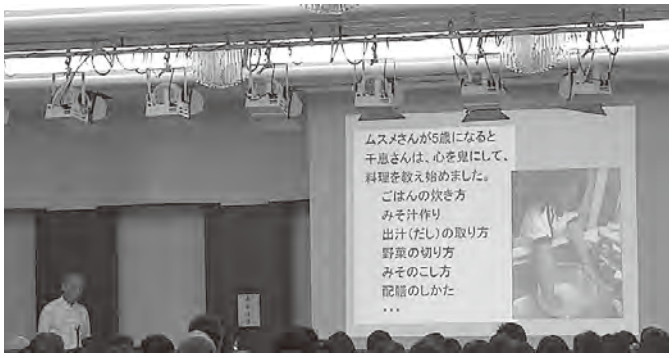
はなちゃんのお母さんは音楽大学の声楽科を卒業し、中学校の音楽の先生でした。乳癌になって左胸を切り落とした後で、結婚をして子どもがお腹に宿って、抗がん剤を使わずに子どもを産み育てる選択をしました。自分が亡くなる、長くは付き合えないという状態のなかに、子どもに何を残してあげられるか考え、料理を教えることにしました。それから数か月後、お母さんは亡くなりました。

はなちゃんがお母さんから教えてもらったのは、味噌汁の作り方とおむすび、ご飯の炊き方だけです。初めて作った晩ご飯は、シソと梅と塩と醤油で味付けした、とても辛くて食べられないようなものでした。でも「作ってもらったものは残しちゃダメだ」という子育てをしていたから、おとうさんは残さず全部食べたのです。はなちゃんは嬉しくて「パパ全部食べてくれたの。また明日も頑張るからね」と言い、お父さんはゾッとしたから「時々でいいからね」って言ったけど「ううん、パパのために頑張る」と、お父さんのお弁当、チャーハン、餃子、肉まん、オムライス、肉じゃがを作り、肉じゃがの中に入れる肉は牛肉は高いから豚にしようとか、そういったことをしていくうちに「喜んでくれる」という世界を知ったのです。これは利己主義じゃなく利他主義なのです。私は自分の専門は歴史ですが、人類の歴史をずっとたどってくと、

長い目で見ると利他主義の方が発展するという現実が出てきています。自分が得するより、協力することの方が社会が発展するっていう現実が今の歴史の中にあるわけです。そのことを分かったうえで行動する大人たちが増えれば、世の中良くなっていくだろうと思うのです。彼女は今、大学４年生になり、食に関することを勉強しています。



先生が作成したスライドショーが流れます。
BGMの「ハナミズキ」はお母さんが歌っています。



このスライドショーを全国で、小学生、中学生、高校生を相手に見せてきました。

2,600回を超えて講演した中でいろんなケースがありますが、500人くらいの中学校でのこと。生徒指導困難校で体育館に入って座るまでにすごく時間かかり、先生が叫んでも無視をする。その状態で講演が始まったのですが、このスライドショーを見始めた時に、生活指導の先生がいちばん手のかかる生徒の真ん中で静かにさせるために座っていました。この映像をみて、その先生が号泣したのです。とてもいい現象が起きたので「先生、花ちゃんの親戚ですか？」って言ったら「違います」って。それを見た生徒たちがびっくりしたのです。他人の話で涙を流している。他人の話で涙をながすことをもらい泣きと言います。もらい泣きを起こさせるのは、脳、前頭前野と言いますが、ここにある脳を昔は、共に感じるということから「共感脳」と言っていました。社会に適用するためには人の気持ちがわかる必要があるから「社会脳」という言い方に変わりました。現在の脳科学者たちはこの脳を「人間脳」といいます。今、日本国中でこの「人間脳」が育たない環境を作っているのです。

親たちが一生懸命になって勝ち組になろうとすることがその原因になっています。その勝ち組になるということは、子どもの未来にプラスになる、我が子に幸あれって思ってやっていることが、実は長期的に見るとよくないっていう現象が起きていますということの結果がでています。それを文科省はわかっているのです。そのことを訴え続けているのです。しかし、現場はそうじゃない方向に動いてきました。

どれほど大人たちが徹底的に子どもに台所に立つなという子育てをしているか。その子育てのなかで子どもは身に着けていきます。家族の食事を作るのは自分の仕事じゃない。作ってくれるのは親だ。親が作ってくれないのであれば買いにいけばいい。そういうことを毎日毎日教え続けてきている。

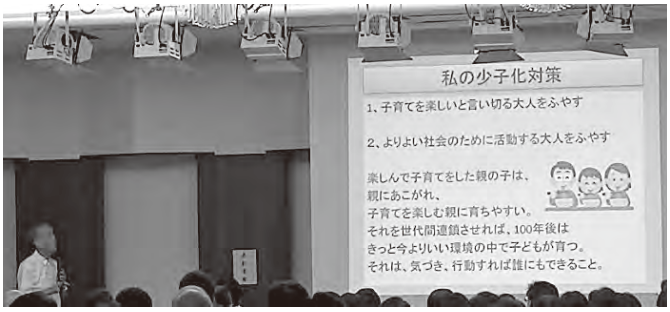
台所で育つ非認知能力。作っているとき、そして、家族との交流の中で見事に非認知能力が育っていきます。一緒に笑うとか、もらい泣きをするとか、怒りとか、共感するということを食卓で子どもたちに伝えてほしいなと思います。

食事というのは五感、視角、聴覚、嗅覚、味覚、触覚を総動員させて人間関係をつくる場です。人間関係をつくる場そのものを粗末にしている現実が今日本国中で当たり前になっています。

私は料理というのは、食材の命に料理を作った人の寿命を30分かけたら30分、その人の命をその料理の中に和えている。その和えいてる場面を見て、お母さんの人生の一部がこの和え物の中に入っていて、それを自分はいただいて、結局、自分の次の世代に渡すという感覚そのものが無意識のうちに沸くのです。そんなこと言っても、今は女性も大変な時代で、冷凍食品やインスタント食品は上手に使えばＯＫです。それに依存しなければＯＫです。「親の笑顔」が最高の調味料になるからです。あなたが食事の準備をするのが楽しくて仕様がないという状態で「評判のいい冷凍食品買ってきたよ」って楽しそうに食べればそれはそれでＯＫです。そうせざるを得ない状況があることがわかっていれば、ほとんど不都合は起きないと思います。ところが「またあんたの食事作るんか、面倒くさいな、もう外に食べに行こうか」って言って、自分が食べるものを作るのを嫌がっている親を見ると子どもは段々、子どもなんて育てるものじゃないってことを考えていくようになります。子育ては大変と訴え続けている、教え続けている社会。テレビでよく聞く夏休みのお昼ごはん問題。お昼ご飯をつくるのが嫌、めんどくさい。日本国中の親はそうだということを夏休みの番組として放送しています。子どもが観たら、給食食べているから親は喜んでいて、給食がないと親は嫌がっているのだ。そう思ってしまうわけです。

今、夏休みを短くしようという理由の中に食事を作りたく

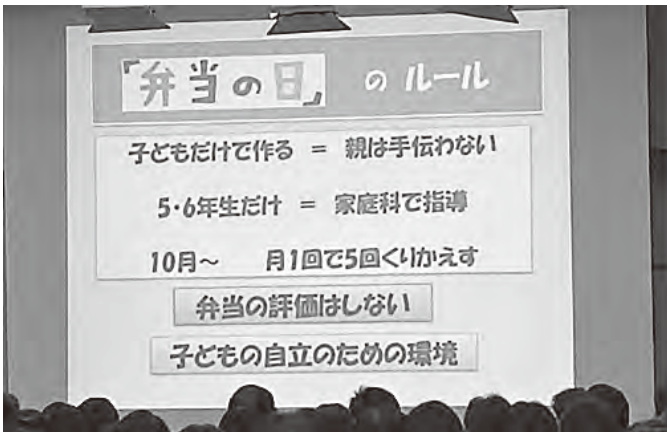
ないから、作れないからって声もはっきりでてるわけです。最近の若者たちは子どもを産みたがらない。特に若い女性が子育てを嫌がる傾向は目に余るものがあります。１家族当たりの子どもの数は１人か２人になってしまった。このままでは国が衰退してします。



私が思う少子化対策を言います。２つです。

「子育ては楽しいと言い切る大人を増やす」この会場の人全員、あなたたちに関わった人全員が、子育てって楽しいよねって言い切れる状態を作れたらいいと思います。それからもうひとつ「より良い社会のために活動する大人を増やす」活動しないとダメです。是非、活動してほしいと思います。

この４人の女の子が弁当を見せてくれいている写真は私が撮りました。この子たちは『弁当の日』が始まるまで、親の反対があって台所に立っていませんでした。包丁を持たせていない、ガスコンロにさわらせていない、早起きできないという理由でPTAからも反対されました。だけど、校長の権限で「させたら結構やりますよ」って言って、させてくださいって言って、させたら大喜びをしました。



この子たちは、小学校５年生で５回、６年生で５回、10回「弁当の日」を経験して卒業していきました。

私がこのうちのひとりに電話をしました。

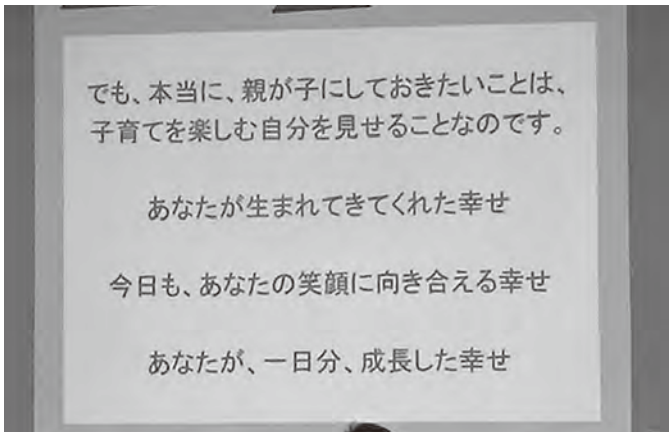
「あの時の４人の写真もう一回撮りたい、いいか？」と言ったら「はい、わかりました」って言って。何がわかっているかっていうと「弁当を作って持っていけばいいんでしょ」と・・・。

この４人、同じ位置に並んでいます。この子たちがこう言いました。みんな香川県在住で社会人です。

「先生お久しぶりです。毎日弁当を作っています。楽しいです。」って言うのです。

人類は小さいうちに労働と遊びの区別がつかない時期に大切なことを身に着けていくシステムを持っているのに、そのシステムを親が台所に立たせないという方法でストップしてしまったのです。約80年かけて…。

それを『弁当の日』という方法で戻せます。戻ったという現実がここにあります。このうちのひとりの子が結婚し、子どもが産まれた時にわざわざ講演会場まで来てくれました。「先生、子育て楽しいです」と、言いに来てくれました。この子が２人目の子どもを産んだ時、上の子が２歳、下の子が０歳。この２歳の子が卵焼きを作って、弟に食べさせるというシーンを私が写真を撮りに行き、はなちゃんのお父さんの安武信吾さんがビデオカメラを持って行って、それを映画にしました。私は県の教育委員会にこの映画を県下でたくさんの場所で上映してくれませんかと提案をしたのですが、まだ実現はしていません。いいと思っていても情報発信しないとダメなのです。だから今日はとっても素敵な情報発信の機会をもらっ



たので感謝しています。

100年未来まで私たちの思いは伝えられる。私はもう伝えていると思っています。だって、教えた子が自分の子を台所に立たせているわけですから。そして、育てられた子供がまた、自分の子どもを台所に立たせると思っています。子育てが楽しいという感覚をこの『弁当の日』という方法で、体験させてほしいと思います。

＜夏休みは子どもを台所に立たせるチャンス＞

「弁当の日おいしい記憶のエピソード」募集というのを２年前から文部科学省が文部科学大臣賞という賞を出してくれることになりました。もう７、８年程やってきているのですが、3,500ぐらい応募があります。審査しながら私、泣いているのです。3,500人の子どもが家族に喜んでもらおうと思って、一生懸命になって、台所に立って、一人で料理を作って、その後、家族の反応を見て喜んでいる。このような成長の場面子どもたちに与えることができるのです。

私は小学校、中学校の校長で実践をしてきましたが、それは初中局（初等中等教育局）の話なんですね、初中局の中に余事の子ども対象の世界もあって、こども園の子どもたちに文章を書かせたり、写真を撮らせるというのはちょっとハードルが高いけれど、それと同じようなアイディアがあれば、それをすることによって、子どもたちが自分小さい時にこんなことをしたよねって、いい記憶として残り、自分も親になったら子どもを台所に立たせてみようという気持ちを持ってくれたら嬉しいです。

竹下和男氏　プロフィール

＜生まれ＞

1949年生まれ　香川県

＜学　歴＞

香川大学教育学部

＜職　歴＞

香川県内の小学校　９年
香川県内の中学校　10年
香川県教育委員会　９年
平成12年度～綾川町立滝宮小学校　校長
平成15年度～高松市立国分寺中学校　校長
平成20年度～綾川町立綾上中学校　校長
平成22年度～オフィス弁当の日設立
　　フリーで執筆・講演活動

（文責　紫和恵理子）

提案発表

「こどもたちにありがとうをつたえたい」

～子どもたちの健やかな成長のために　親子でつないできたこと～

東京都北区立うめのき幼稚園
令和５年度 PTA 会長
須藤　あづさ

１．はじめに

うめのき幼稚園のある東京都は、全国で最も多い約1400万人が暮らす世界有数の大都市で、行政区域は特別区である23区と、26市５町８村からなっています。現在、東京都公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会に所属する区は16区あり、111園、5188名の家庭が加入しています。この東京都北区に、北区立うめのき幼稚園があります。北区の人口は約36万人。東京都北区立幼稚園・こども園PTA連合会に所属する園は４園あり、203名の家庭が加入しています。

北区の名所のひとつに、八代将軍吉宗が江戸庶民の行楽のために桜を植え開放したとされる飛鳥山があります。この飛鳥山は、日本近代社会の創造者で新しい１万円札となる渋沢栄一が、明治34年から昭和６年に亡くなるまで暮らしたことで知られています。

うめのき幼稚園は北区の西南部の赤羽地区にあり、梅木小学校の敷地の中に幼稚園があります。閑静な住宅街の中にあり、23区ではめずらしく、園庭の自然環境に恵まれている幼稚園です。地形を利用した土手が園庭にあり、散歩道は、正門脇から園庭まで続いています。生き物や自然の恩恵を見つけるのが子どもたちの楽しみです。

２．園の概要

昭和47年４月１日に東京都北区立うめのき幼稚園が創立されました。

令和４年に創立50周年を迎え、区長はじめ地域の皆さま、

修了生が参加し盛大に記念式典が行われました。教育体制は２年保育で、４歳児18名、５歳児11名の合計29名です。うめのき幼稚園は令和６年３月31日に幼稚園としての役目を終え、令和７年４月に、近隣のじゅうじょうなかはら幼稚園と統合再編が行われ、現在のうめのき幼稚園の場所で「うめのきなかよしこども園」として生まれ変わります。

３．園の教育目標

げんきな子ども「げんきもりもり」、考えられる子ども「ひとみきらきら」、思いやりのある子ども「えがおにこにこ」です。自然がいっぱい・友達がいっぱい・遊びがいっぱい豊かな自然のある環境の中、遊びで育つ心と体。小学校や地域（人々、施設）、様々な交流と豊かな体験があります。子どもたちは、園内の豊かな環境で、のびのびと自由な発想で遊びます。

４．うめのき幼稚園のPTA活動

５．すてきな体験「うめのき劇場」

当園のPTA活動のひとつ「うめのき劇場」について紹介します。保護者同士が協力して、園児の情操教育に良い影響を与えることを目的とした活動です。また保護者同士の交流を図るとともに親子の共通の話題を広げることができ、子育ての楽しさや喜びを感じることができると保護者が自主的に立ち上げ、始まった活動です。毎年１度、開催されます。演劇が子どもにもたらす影響は「情動機能の活性化」「感受性の向上」等が言われています。うめのき劇場では、保護者が子どもに向けて「歌」や「演劇」を行います。保護者が一生懸命に練習する姿や舞台に立っている姿を子どもが観る機会でもあります。「親子の絆の構築」「親と子のコミュニケーションを活性化」が加わり、子の情操を活性化し幼児教育の意義もある活動であると思います。はじまりは昭和59年、第三代園長浅井護先生のもと子どもたちの園活動「生活発表会」を見て、心を動かされた保護者が「子どもたちにお返しをしたい」、「ありがとうの気持ちを伝えたい」という想いから始まった活動で「お母さん劇場」として誕生しました。保護者が子どもたちに届けた最初の催し物は、保護者全員による「歌」でした。

催し物は多岐にわたり、保護者全員による「合唱」をはじめ、時には「お父さん劇場」として有志の父親が楽器を演奏し歌を披露することもありました。時代が経過するとともに、午前中の保育時間を「うめのき劇場」として活動をし、保護者による「劇」「人形劇」「手品」「ダンス」「ソーラン節」など当時の保護者が得意とする分野に分かれて行われました。先生方も「劇」や「音楽」などを披露しうめのき劇場に全員が参加し子どもにとっても特別な日でした。

このPTA活動は、歴代の保護者の想いが受け継がれて、令和５年までの40年間、途絶えることなく、続いてきました。

６．うめのき劇場と時代の変化

うめのき劇場は、うめのき幼稚園のPTA活動の一つであり、保護者全員が演目に参加し、子どもも保護者も先生方も一緒に楽しみの時間を共有してきました。しかし、時代の変化とともに区立幼稚園へ入園する児童の減少、保護者の生活も多様化、この40年の間で時代の変化が訪れました。その変化により、その時のスタイルでうめのき劇場を継続することが困難であると言われた世代もありました。平成21年より「無理なく楽しいうめのき劇場」をコンセプトに掲げ一部改変を繰り返しながら、途絶えることなく続けてこられました。「完

壁を求めず、保護者の方が楽しんでやっている姿を子どもたちがみて、歓喜の声を上げ楽しんでくれる、それがあれば大成功である」と当時のクラブ長が述べています。人数が多すぎて意見がまとまらずグループの人員を減らす工夫、園児数の減少により、保護者の数も減少、運営していくための人数やなり手不足も懸念され、歴代の保護者がうめのき劇場を継続していくために工夫をしてきました。

令和２年、新型コロナウイルス感染症が世界を襲いました。ですが、保護者の想いが消えることはありませんでした。降園前の30分以内でマスクを装着し、演目の内容を絞り、屋外で活動をしました。それからの４年間、30分間で行われ、昨年は歌を２曲歌いました。子どもたちも先生方も全員で歌い、楽しく素晴らしい時間を過ごす事ができました。

７．課題とまとめ

「やることが大事なのではない、なぜやるのかが大事」

うめのき劇場は、保護者が演目の内容を決めるところから始まります。このゼロの状態から活動が始まるということで、何もわからないという不安から精神的な負担感が生じ、わからないが故に気持ちが不安になることが考えられます。

うめのき劇場は子どもたちが生活発表会（現・子ども劇場）を見せてくれたお返しとして始まりました。保護者が一緒に子どもと楽しむ場であり、保護者自身が達成感を味わえるのが醍醐味です。そして何より「子どもたちが満面の笑顔で歓喜の声を上げ喜んでくれる」それを体験できる場です。PTA活動だからとやることが大事ではなく、活動の意図や行う意味を説明し、保護者がそれに納得し行動に移せることが大事であると考えています。

「受け止め方次第で、PTA活動は参加したい活動へ」

PTA活動は、活動の意図・行う意味を説明し、保護者の中で「受けとめ」があり「納得のもとに活動が行われる」ことが理想的です。また、PTA活動を通して保護者の仲が深まり、今後の活動が良いものとなります。このことに歴代保護が向き合ってきました。

時間的な余裕がない人、人前が苦手な保護者でも取り組めるよう、集団活動を取り入れ、活動時間を減らし、内容に柔軟性を設け、参加は自由参加にするなどの枠組みを用意することで気持ちの負荷が減ります。また、保護者が子どもたちと一緒に楽しむ時間を共有し、楽しむ子どもたちの姿を見られることで重たかった気持ちから軽やかな気分になるのはないでしょうか。そして体験した保護者へは、プレゼントとして、「体験した人にしかわからない、うめのき劇場の良さ」が返ってきます。

園児数の減少や、生活の多様化、働くお母さんの増加、早期に社会生活や教育環境に入れたいと考える保護者の増加など、時代の変化が40年間にありました。保護者が負担を負うことがなく継続していけるように、開催時間短縮、催し物の内容を絞る、参加する保護者は有志にする、来賓を絞るなど、年を経て少しずつ変化を加えてきました。子どもへの愛情と伝えたい想いをもとに、保護者同士がPTA活動に真摯に向き合ってきたこと、保護者や先生方が工夫を積み重ねた結果、このようにうめのき劇場は絶えることなく続いてきたのだと思います。

８．おわりに

ご縁があり入園したうめのき幼稚園で「うめのき劇場」に出会えました。現在、このようなPTA活動を40年にもわたり続けられていることは稀であると思います。私自身が２年体験し、子どもたちの感激と喜びを間近で感じることができたことは、私の心が動かされる体験であったと感じています。時代の流れの中、保護者が子どもたちへの愛情を基に、子どもたちのためにできることを、柔軟に変化させ実現してきました。子どもたちへの愛情がもとになっているうめのき劇場の思い出が、子どもたちの心の栄養になり、健やかに成長していけますよう願っています。

提案発表

「たこたこ揚がれ　わかばっ子の笑顔　地域とともに歩む　温かいPTA活動を目指して」

認定こども園
射水市立大門わかば幼稚園
令和５年度みつば会会長
北　拓也

１．はじめに

射水市立大門わかば幼稚園は、富山県のほぼ中央部に位置する、人口約９万2000人ほどの射水市にあります。射水市は北部には海、南部には山が広がる自然豊かなまちです。平成17年に５つの市町村が合併し、発足しました。園があるのはその中の大門地区と呼ばれる地域で、「絵中大門凧まつり」という50年近く受け継がれてきた祭りがあります。今年は５年ぶりに開催され、小さな子供たちからお年寄りまで多くの人が凧揚げを楽しみました。本園の子供たちも毎年思い思いの絵を凧に描き、揚げています。

２．園の概要

本園は、富山県の南西部に位置し、西には１級河川庄川が流れ･東には田園が広がる富山県射水市にあり、同じ地域内にあった３つの幼稚園が統合して、平成18年に幼稚園として開園しました。令和２年に、幼稚園型認定こども園に移行し、１・２歳児の受け入れを開始しました。

園の周りには、小学校･中学校･高校・緑地公園・総合体育館・保育園・老人介護施設・病院などがあり、文教地域となっています。園舎まるごと遊びの空間をコンセプトに建設された園舎は、オープンスペースとして使える保育室や廊下、広い遊戯室、小川が流れる中庭や砂場、思いきり体を動かして遊ぶことができるグラウンドなどがあり、木の温もりのある明るい園舎となっています。園児数は、１歳児12名・２歳児８名・３歳児14名・４歳児18名・５歳児15名で、67名が在籍しています。

３．みつば会の活動について

３園（旧大門中央幼稚園、浅井幼稚園、櫛田幼稚園）から集まった、わかばっ子が元気に心豊かにたくましく成長していく姿を見守っていく親の会として、“みつば会”（みっつの園のわかばっ子の父母の会）が発足しました。

組織としては、会長、副会長、監事、会計、各学年の学年委員長、学年委員がいます。それぞれの役員が、厚生・広報・教養の３つの専門委員会に所属しています。厚生委員会は、小学校と合同で行う資源回収、園庭除草、ありがとう幼稚園清掃などを実施しています。広報委員会は、年２回の広報「みつば」の作成・発行に携わっています。教養委員会は、みつば会主催の教養講座を開催しています。

＜主な活動の紹介＞

【夏祭り】

毎年、７月に「夏祭り」を行っています。みつば会の役員がグループに分かれ、「子供たちに楽しんでもらいたい」という思いをもって、企画と運営を行います。

令和５年度は、新型コロナウイルス感染症が第５類に引き下げられ、初めての祭りとなりましたが、未満児～年長児まで時間帯を３つに分け、来場人数は制限せずに開催しました。的当てゲーム、浮き輪投げ、くじ引きゲームの３つのゲームやゲームを待っている時間にも楽しんでもらえるようにフォトスポットを作ったり、ぬりえコーナーを準備したりと会員の創意が溢れる素敵な夏祭りをすることができました。事後に行ったアンケートでは「作ったものが細かく丁寧で、親も子供も一緒に楽しめました！」「姉のときはコロナで開催できず、昨年は人数制限があり、寂しい思いをしたが、今年は一緒に参加できてよかったです！」など、感謝の気持ちや夏祭り開催について肯定的な意見をたくさんいただくことができました。意見の中には「ぜひ、来年は盆踊り等の園児全員

が参加できる内容も」という要望もみられました。今後も会員のみなさんと一緒に「夏祭り」を大切に継続していきたいと思っています。

【親子活動】

年長児を対象に親子で一緒に体験活動を行っています。令和５年度は射水市にある「匠の里」で陶芸教室を行いました。事前に作品に入れたいイラストの型紙を準備し、お皿を作りました。粘土が思ったよりも伸びずに苦労している親子もたくさんいましたが、アイデアいっぱいの作品が仕上がりました。

参加した保護者のみなさんからは「準備段階から子供とコミュニケーションをとることができたことに加え、当日の制作もたくさん相談しながら進めることができたことがよかった」という意見を多くいただきました。また、「年少児のときは、うまくいかないと投げ出していたが、今回は最後までやり抜いたところに成長を感じた」という感想もあり、家庭の外で行う親子活動だからこそ見える姿も一つの思い出になっているようでした。

【教養講座】

毎年、少しでも子育て世代の保護者の悩みを共有したり、子供たちとよりよく関わり合ったりできるように教養講座を行っています。令和５年度は富山国際大学の塩見先生をお招きしました。幼少期の子供たちにどのように接していけばよいのか、経験を交えて具体的に教えていただき、有意義な時間を過ごすことができました。話の合間には保護者同士が繋がれるように、相談する時間を設けるなど、たくさんの保護者が話に引き込まれていました。最後には質疑応答の時間もあり、各々が思っている日頃の悩みに丁寧に答えていただきました。

毎年、卒園式を迎える前の２月に園舎を美しくしようと清掃活動を行っています。年長児の保護者にとっては３年間お世話になった幼稚園への感謝の気持ちを伝えられる機会となっており、令和５年度もたくさんの方に参加していただきました。担当場所に分かれ、一緒に活動する中で、普段は関わることが少なかった異年齢児の保護者との交流も図ることができることもこの活動のよさです。

４．おわりに

PTA活動は「子供たちのため」に行う。この言葉に尽きると思います。しかしながら、本園では今まで受け継いできたＰＴＡ活動を従来通りに行っていくことが難しい現状にもあります。園の現状として、園児数が減少したり、開園時間の延長が行われたりすることで、先生方の負担が増えています。また、国全体でも問題視されている幼児教育、保育に携わる職員自体が不足している一方で、働き方改革を推進されているジレンマに悩まされていることなど、園を取り巻く問題は様々です。先生方の忙しさを考えると心苦しく思います。さらに令和２年度からこども園となったことで、役員を含め会員の家庭環境も多様になり、役員会や行事に向けての準備等で足並みを揃えていくことも難しくなっています。

新型コロナウイルス感染症の移行期ともいえた令和５年度は上述の問題を抱えながら、現状に合わせながら、子供たちのためにどのようにＰＴＡ活動を進めていけばよいのかを考える一年だったように思います。「コロナ禍前に戻す」「コロナ禍同様にする」と安易に判断しがちなところもありましたが、園長先生はじめ職員の方たちと一緒に園と家庭そして地域が一体となって、活動を進めることができました。今後も今の自分たちに何ができるのかをよく考え、子供たちの笑顔につながるＰＴＡ活動を続けていきたいと思います。

提案発表

「PTA活動のあり方と工夫 ～保護者同士のつながり～」

石井町立藍畑幼稚園
令和５年度ＰＴＡ会長
柏木　勇輝

１．はじめに

藍畑は、徳島県東部に位置する石井町の北部、吉野川沿いに広がる畑作地域です。昔は藍の栽培が盛んで、園の周辺には田中家住宅などの伝統文化財があり、田畑もたくさんあることで、四季折々の作物に触れることができます。学校と地域の結びつきは強く、教育にも熱心で協力的です。農業地帯の中に住宅団地も増えはじめ、核家族化が進んできており、両親と子供という家庭がほとんどになっています。３年間にわたるコロナ禍もあり、近所や同級生の親同士であっても、昔に比べてつながりが希薄になっているように感じています。保護者が幼稚園の行事やＰＴＡ活動に取り組むことで仲良くなり、お互いの子供の成長を感じながらつながっていけるようにしたいと思います。

２．園の概要

藍畑幼稚園の園章には７つの地域の子供の輪、藍の葉、吉野川が象徴されています。昭和25年１月に藍畑保育所として

小学校に併設され、昭和31年に名称が石井町立藍畑幼稚園になり、今年で74年になる伝統のある幼稚園です。現在は、少子化が進み、園児数29名２学級の 小規模園となっています。藍畑小学校とは、園庭・校庭を共有していることで、間近に小学生や先生の姿を見ることができ、親しみを持てています。そのため、小学校への接続が比較的スムーズにできていると感じます。地域の方たちは、１年を通じて幼稚園や園児のことを気にかけてくださり、大切に見守ってくれています。幼稚園を卒園された方もたくさんいて、とても地域に愛されている幼稚園です。

３．ＰＴＡ組織について

藍畑幼稚園のＰＴＡ組織は、本部役員８名、地方役員10名、会員、先生方から構成されます。本部役員は、会長１名、副会長３名（家庭教育委員長含む）、幹事２名（交通安全部長・保体部長）です。全保護者が、家庭教育部、保体部、交通安全部に分かれて活動に取り組んでいきます。また、役員全員で幼稚園夏祭り保護者のお店について計画・準備したり、表現会の保護者出し物の相談をしたり、ベルマークの収集・整理などの活動をしています。

４．ＰＴＡ活動

＜藍幼夏祭り＞

７月に幼稚園で園児と保護者が参加する夏祭りを開催しました。最初に園児たちが法被を着て地元の盆踊り”石井音頭”を披露し開幕します。その後で、お店屋さんごっこを楽しみます。はじめは、保護者がお客さんになり、お店を回りました。次に保護者が店を開いて、園児がお客さんになり楽しみました。その中のお化け屋敷は役員が数か月前から子供たちに楽しんでもらえるようにどんなお店にするのか話し合いを重ね、忙しい合間を縫って当日までに準備をしました。その甲斐もあって、”お化け屋敷”のクオリティが高く、怖くて泣き出す子もいましたが、園児たちから「楽しかった～」と言ってもらい、保護者も心から喜んでいました。園児、保護者ともに思い出に残る夏祭りになりました。

＜夏季除草作業＞

毎年８月に幼稚園、小学校合同で園庭の除草作業をしています。開始時間が早朝にも関わらず、たくさんの保護者の方が参加し、また園児の兄姉も作業を手伝いに来てくれました。例年参加率は高いですが、なんと今年の保護者の方の参加率は100％でした！！子供達が元気いっぱいに安全に園庭で活動ができるようにと願いながら黙々と作業している姿を見て、保護者の方々の子供への想いを感じました。また後日に、「少しやり残したところがある」と仕事終わりに草刈り機や道具を持って、作業していただいた保護者の方もいました。大変な作業ですが、作業終わりの保護者の方々の清々しい顔が印象的でした。

＜運動会ごっこ＞

９月の参観日に小学校体育館で「運動会ごっこ」をしました。近年ではコロナの影響で運動会が時間短縮での開催になり、種目数が減少し、保護者としては少し残念な時期が続いていましたが、参観日を運動会のようにと親子参加型で開催していただきました。まるで運動会のように競技や種目に一生懸命に取り組む子供たちの姿を見て、子供の成長を肌で感じられる素敵な時間になりました。また保護者も綱引き対決があり、子供たちの大声援の中で結果だけではなく、本気で勝負をする姿を子供たちに見せられることができました。保護者は園児を応援し、園児は保護者を応援し、親子で体を動かして互いに良い汗をかき、体を動かす気持ちよさを味わいました。

＜表現会＞

今年の表現会は大きな声で歌ったり、元気いっぱいに踊ったりできるようになり、保護者としては元気いっぱいの子供たちの姿が見えて大変嬉しかったです。また、コロナ禍で見送られていた保護者参加も復活しました。今年は、「可愛くてごめん」をお父さんが女装してアイドルになりダンスを、お母さんはヲタクの格好をしてヲタ芸を披露しました。本番までに各自で振付を覚えるため個人練習をし、全体練習は時にはダンススタジオを借りてしていました。子供達が喜んでくれる楽曲と構成を保護者の方々が考えて、家事、育児、仕事と大変忙しい中で練習時間は限られていましたが、子供達の笑顔が見られるようにとの思い一つで一生懸命に練習に励みました。本番では子供たちが満面の笑みで大喜びしている姿を見て、保護者も本当にやってよかったと心から感じることができました。この活動が楽しい思い出として子供たちの記憶に残ればいいなと思いました。

５．地域とＰＴＡの活動

＜ごぼう掘り見学＞

ごぼうを育てている園児の保護者の方のご厚意で、「ごぼう掘り見学」にお邪魔させていただきました。普段は調理されている姿しか見たことがない子が多い中で、畑を見ながら土の中にいる「ごぼう」に興味津々で説明を聞く園児たち。

実際に機械で、収穫する様子を見せてもらいました。ごぼうの長さや葉っぱの大きさに驚いて感動していました。大きいごぼうを手に持たせてもらい、とても良い表情をしていました。その日の帰りに、立派なごぼうを園児たちが家に持ち帰り、美味しくいただきました。普段の生活では見ることができないことを子供たちのためにと保護者の方から提案いただき、地域との繋がりを感じることができました。また、行き帰りの道中に近所の地域の方々に大きな声で挨拶をして、地域の方々とも触れ合うこともできた、素敵な時間になりました。

＜とうもろこし狩り＞

とうもろこしを育てている園児の祖父母の方のご厚意で、「とうもろこし狩り」をさせていただきました。畑に大きく育っている、とうもろこしを見て圧倒される子供たち。普段食べている黄色い姿とは違う姿に戸惑う子供たち。説明をしっかりと聞いて、黄色い姿のとうもろしが隠れていることを知り、驚きと安心の表情を浮かべる子供たちでした。いざ収穫の時は恐る恐る近寄っていましたが、徐々に慣れてきて、勇敢に収穫をする子供たちの姿に成長を感じました。毎年、保護者の方や地域の方から子供たちのためにと、野菜の収穫や体験などの提案をいただいており本当に素敵な地域の中で育つ子供たちは幸せだなあと思います。このような体験が子供達の成長に繋がり、また地域との関わりが増えることで子供たちが安心安全に暮らせる街作りにも繋がるのではないかと思います。

＜ふれあい大会＞

毎年10月に、「藍畑ふれあい大会」があります。地域のコミュニティの方々の主催で地域の方々にご協力いただき、地域の交流や清掃活動を目的として、公民館で開催しています。清掃活動としては公民館から河川敷まで30分程ウォーキングをして、河川敷で軍手とゴミ袋を手にゴミ拾いを行います。公民館ではバザーを開催しており、河川管理についての講義がされています。また餅つき体験で作ったお餅や炊き出しセットで作ったカレーが振舞われ、清掃活動をした疲れを癒してくれました。最後に、「藍畑○×クイズ大会」を開催し、地域の歴史や現状を知ることができました。子供たちが安心安全に暮らすためには地域の方々のご協力が必要不可欠だと思います。近年は地域との交流が減少している中で、「藍畑ふれあい大会」は貴重な場となっており、今後も子供たちのためにも継続して開催していただきたいです。

＜公民館祭＞

毎年２月に「藍畑公民館祭」があります。地域のコミュニティの方々の主催で地域の方々にご協力いただき、地域の交流の機会として公民館で開催されています。幼稚園児の歌の発表、舞踊やフラダンスなどの発表と、老若男女で様々なジャンルの発表がプログラムに組まれて催されます。また、幼稚園の作品、小学校の作品、書道や盆栽などの様々な作品を展示しているスペースもあり観覧することができます。それぞれの発表や作品は地域の教室や個人の方が出演や出展をしており、地域の交流やコミュニケーションが取れる場にとなっています。今年は、徳島県のマスコットキャラクターの「すだち君」と石井町のマスコットキャラクターの「ふじっこちゃん」が会場に遊びに来てくれて大盛況でした。

６．おわりに

本園では、保護者と先生方、地域の方が一緒になって子供たちの成長を見守ってくれています。ＰＴＡとしても昔からある良き伝統を守りつつ、時代に合わせたＰＴＡ活動を続けていきたいと思います。コロナ禍の中、会員全員で園行事やＰＴＡの活動を創意工夫してきました。仕事を持つ人や家庭の事情でなかなか参加しにくい人たちでも、参加しやすい環境や雰囲気をつくり、ＰＴＡ活動に少しでも関われて良かったと思ってもらえるよう、子供も保護者も笑顔になり、地域の方の力もお借りしながら、お互いにつながっていけるような取り組みを継続していきたいと思います。

指導助言

文部科学省
総合教育政策局　地域学習推進課
課長　高木　秀人

昨年12月に「はじめの100か月の育ちビジョン」といったものが出ております。正式名称は「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」です。「はじめの100か月」というのは妊娠期の10か月～小学校１年生の終わりまでが94～106か月。この最初の100か月間が生涯にわたるウェルビーイング（幸福感）の向上のために重要な期間であり、そのために周りの大人はどうしたらよいのか、５つのビジョンを示しているところです。

そのうちの１つとして「安心と挑戦の循環を通してウェルビーイングを高めていきましょう」という安心・アタッチメント、愛着です。子どもっていうのは安心感がまず重要なので、その安心感があった上で挑戦に向かっていける。親や保育者から離れていろんな活動をしようとする。その活動の内容としては豊かな遊びと体験が重要といったことがまとめられています。また、保護者・養育者だけががんばるのではなくて、周りの人が一緒に支援し、応援していきましょう、また、社会全体でそういったこどもたちを支援していく、支える環境の厚みを増やしていきましょう、ということが書かれています。幼児教育・幼稚園のＰＴＡ活動とも親和性となる話となっておりますので、お時間があるようでしたらこども家庭庁のホームページでもご覧いただけます。

ウェルビーイングという言葉をいくつか使いましたが、身体・心・環境・社会に通じた全ての面における幸福感の向上、そういった形でこども家庭庁の方は使っています。昨年12月に閣議決定いたしました「こども大綱」にも記載されている言葉であります。

一方、文部科学省では、昨年６月に「第４期教育振興基本計画」が閣議決定されました。大きなコンセプトとして２つあります。１つは「2040年以降を見据えた社会の創り手の育成」です。先行きが全く分からない2040年以降の世界に向けて新たな社会を創り出していく、そういった子どもたち・大人を教育していきましょうというのが１つ目の大きな目標です。もう１つは「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」です。こちらはウェルビーイングといった言葉が梯となって交友的・子育て的・福祉的な観点と、教育的観点を結び付けています。ウェルビーイングとは幸福感ですが、ハピネスという言葉を使っていません。ウェルビーイングもそのような意図はあるみたいですが、ハピネスは自分が幸せになっていく、というニュアンスがありますが、ウェルビーイングの中で特に日本社会に根差した、みんなで一緒に幸福になっていきましょう、共存的に幸福になっていきましょう、というような日本社会を根差して進めていきましょうといったことが昨年６月に閣議決定しました。そういった大きな２つのコンセプトに基づいて文部科学書の様々な企画を進めていっているところです。

一方、日本全国そうなんですけど、人口減少社会といわれますが、子どもたちの人数も減ってます。大人の人数も減ってきてる。各地でもご苦労されてることと思います。今回の発表でもいくつかありましたが、幼稚園・こども園の統廃合が進んでいるという現状。そもそも、子どもが減ってきて、保護者も減ってきてる、そういう中で、どうやって地域と上手く付き合っていくのか。幼稚園が単独で、小学校が単独で一生懸命やっていきますといったところで、人数が少なくて無理です。地域の方々と一緒に様々な事を良くしていきましょうと、人つくり・地域つくりといった形で進めていく。学校・幼稚園だけではなく、地域・家庭と連携があって地域社会全体を良くしていきましょう、といった観点から進めています。そういった政策がこれから増えていくということを認識いただければと思います。教師の働き方改革と言われていますが、先生方だけが一生懸命やるのではなくて、家庭・地域が役割分担しながら、学校運営・幼稚園行事をこのような観点で進めております。

＜北区立うめのき幼稚園＞

子どもたちにお返しをしたい、親が頑張っている姿を見せる。コンセプトとして非常に良い形で、色んな工夫をしていると思います。持続的なPTA活動を進めていくためには、時代にあった工夫というのが重要だと思っております。ここが最終点ではなく、さらに改革していくことによって変わっていくと思います。さらなる工夫を続けていくことによって持続的な活動ができるということだと思います。

＜大門わかば幼稚園みつば会＞

夏祭りで子どもたちが盆踊りをするという保護者からの要望をうけて、先生からの強制でやるものではなくて、保護者の意見を聞いて自主的に活動できる。行事等を改善できる。非常に良い感じだと思います。清掃の際、異年齢の親と交流が出来たといった点も、まさにＰＴＡ活動の１つの利点といったところだなと思いました。

＜石井町立藍畑幼稚園＞

クオリティ高いですね。オタ芸やお化け屋敷など、非常に活動１つ１つにクオリティの高さを求めているのが良く分かります。また、除草活動100％の参加、これがすごいなと思いました。中々100％のご家庭が参加することができないことだと思いますので、こういった地域・家庭に根差した活動をされているのだなと思います。参加しやすい活動をして、環境を務めていきましょう。まさにこれから持続的にPTA活動を進めていくために重要な観点だと思いますので、是非そういった取り組みを進めていっていただけたらと思います。

指導助言

全国国公立幼稚園・こども園長会
会長　高橋　慶子

提案発表をいただきました３園の皆さま、本当にありがとうございます。どの園も地域や保護者から愛されている園だなということを感じました。

＜うめのき幼稚園＞

「ありがとう」を伝えたいということで、うめのき劇場が始まり、これを組織的にしたり、自由参加型にしたり、その場の参加が出来る形にしたりと工夫を重ねています。その事がPTAの活発化を生んでいくのではないかという風に感じました。そして、この園を卒園して、小学校、中学校へいったりした時に「あの時、お母さんやお父さんたちのしてくれた あれ、楽しかったよな」と、きっと思い出してくれる。また、保護者もそのような活動をする事で良かったという声が届くのではないかと思います。先ほどの竹下先生のお話にありましたが、あこがれを持つという事がすごく素敵な事なことだなという事を、うめのき幼稚園さんの発表を通じても感じさせていただきました。今度、こども園になるという事で、私も１２年前に幼稚園からこども園に移行した時に、保護者の活動をどうしていくかというところを保護者の方たちと一緒に考えました。どういう風にしていったら子どもたちの笑顔につながっていくかというところを考え、幼稚園のままの組織で今、運営されています。預かり保育を利用している保護者、そして短時間の幼稚園の教育を受けている保護者。お互いに気持ちをかけあって、前向きに活動に参加していると思っています。その気持ちのかけあいが大事なのだと、改めて感じています。こども園になる時に話し合いを充分にしていったら良いかなと思っています。

＜大門わかば幼稚園みつば会＞

印象に残ったことは、先程課長もお話されていましたが、夏祭りで要望の盆踊りをする所もそうですが、待っている時の工夫もしたという所がすごいなと思いました。私たち、幼児教育に携わる者にとっては、いかに子どもを待たせないかというところも非常に工夫をしている点です。年齢や発達段階によっては、待つという事をしなくてはならない時もありますが、待つという一工夫がさすがだなと思いました。また、地域の施設の陶芸の活動を親子で体験すると、子どもたちがどういう風に手を使っているのかとか、体を使っているのかとか、見逃さなかったということがありましたけれども、親子で一緒に体験するという事がすごくいい事だなという風に感じました。そこの施設の前を通ると「あそこで陶芸したよね」ていう事を振り返る事が出来るのではないでしょうか。

＜藍畑幼稚園＞

地域と一体になっているなという所を感じさせていただきました。ごぼう、とうもろこし、公民館祭り、そして素晴らしい藍畑祭り、地域の中に一体化して幼稚園があるという事を感じさせていただきました。表現会の「可愛くてごめん」可愛かったです。とても素敵でした。「ごめんね」じゃありません、とても素敵です。

今、子どもまんなか社会という風に言われていますが、３園の発表は子どもまんなかに付け加えて「子ども笑顔まんなか」というような事がこの発表から見て取れました。子どもを笑顔にしていく、子どものためにという３園の活動が本当に豊かで、素晴らしかったです。

そして、コロナの時にずいぶんマスクの心配をしましたよね。マスクをしている事の弊害がどれぐらいかというような心配を社会で言われる事もありました。

コロナが明けてみて感じた事は、マスクの心配よりディスタンスの心配でした。子どもたちにディスタンスを…とコロナの時に言っていて、コロナ明けではその関わり方が非常に希薄になっていました。例えば、教えなくても「なべなべそこぬけ」とか「せっせっせっのよいよいよい」とか子ども同士である程度は出来ていたのですが「えー？えー？」という声が、子どもたちの間ですごく聞かれました。マスクの弊害より、ディスタンスを取った弊害の方が大きかったなと思いました。そしてその溝を埋めるのがやはり今のＰＴＡの活動の役割だったのではないかなと、お話を聞いていて思いました。よき伝統を重んじつつも、時代に対応した参加の工夫、そして実態に応じた活動の仕方の工夫、そして持続可能な形への変革、そこがあった事、そしてＰＴＡの方たちがディスタンスの距離を埋める事に寄与してくれたという風に思っております。

そして、子どもたちの原体験になっていき、そして成長した時に楽しかったな、また自分も子育てに、そして自分もＰＴＡ活動にという風な循環がきっと生まれると思います。

竹下先生の循環ですよね。そこが私もＰＴＡをやって子どもたちから多くのエネルギーをもらったから、私もまた親になってまたやろうっていう原体験になったのではないでしょうか。園と一体になっている事、地域と一体になっている事、そしてその皆が子どもたちの笑顔と成長を見守っている事、これが素晴らしい発表だったのかという風に思っています。全国のＰＴＡの方々の活動の工夫にも、こんな工夫する点があったのかなという風に思いました。午前中からの竹下先生の講演と、そして今の３園の発表のPTAの活動がすべて循環でつながっているのではないかなという風にかえて、私の話とさせていただきます。

令和６年度 優良PTA文部科学大臣表彰 おめでとう

令和6年度優良PTA文部科学大臣表彰

群馬県	桐生市立広沢幼稚園ＰＴＡ	兵庫県	播磨町立播磨西こども園ＰＴＡ
東京都	中央区立晴海幼稚園ＰＴＡ	岡山県	倉敷市立長尾幼稚園ＰＴＡ
東京都	江東区立第一亀戸幼稚園父母の会	岡山県	鏡野町立郷幼稚園ＰＴＡ
愛知県	岡崎市立梅園こども園父母と教師の会	徳島県	海陽幼稚園ＰＴＡ
大阪府	大阪市立東小橋幼稚園ＰＴＡ	香川県	まんのう町立四条こども園ＰＴＡ

●群馬県　桐生市立広沢幼稚園　活動紹介

「子供たちの笑顔のために」～ＰＴＡとして今できること～

Ｒ６ＰＴＡ会長　周藤　沙織

この度は、全国国公立幼稚園こども園ＰＴＡ連絡協議会に於いて令和６年度優良ＰＴＡ文部科学大臣表彰という名誉ある賞を受賞することができましたことを大変嬉しく思います。歴代のＰＴＡ役員・会員の努力・地域の皆様の温かいご協力とご支援の賜物と心より感謝しております。

本園は、群馬県の東南部に位置し、近くには渡良瀬川や茶臼山といった豊かな自然に恵まれ、生活環境が安定した地域にあります。また、隣接する小・中学校との交流や地域との繋がりも強く『地域の子供は地域で育てる』をモットーに子供たちは優しく思いやりのある心が育っています。

【ＰＴＡ組織】

本園のＰＴＡは会長、副会長、専門部として交通安全部・文化部・写真部があり、保護者全員がいずれかの部に所属しています。本園の実態として共働きの家庭や未就園児をもつ保護者が多いため、できるだけ負担が軽減できるように努めています。会議のスリム化や電子メールの活用、ＰＴＡ主催の行事は手伝える保護者が参加という方法にし、誰もが参加しやすいＰＴＡ活動を行っています。

【ＰＴＡの活動について】

本園は、国道沿いに建つ幼稚園のため、この国道を横断して登園する園児や、他の学校区から登園する幼児もいます。隣接する小学校の駐車場を借用して駐車するため殆どの園児が毎日、横断歩道を渡ります。そのため交通安全教育を最重要課題であると教職員・保護者が共通認識し協力しながら課題に取り組んでいます。

○交通安全部

・交通安全教室

交通安全部を中心に保護者がアイディアを出し合いながら保護者や親子向けの交通安全を年二回実施しています。桐生市の交通ヘルパーを講師に迎え、交通ルールの再確認や雨天時に傘をさして横断歩道を渡ることを想定練習等、親子で学び実践できるよう取り組んでいます。

・スクールゾーン対策委員会

保護者・教職員・地域住民が協力し広沢地区の危険箇所の実態調査を実施し、調査結果を地域のスクールゾーン対策委員会（幼小中担当職員・ＰＴＡ・地域の代表者・警察署員・市生活安全課等が出席）で話し合います。そして、実際に実地調査を行った上で県や市に改善・要望をしていることが、標識やラインの修復など具体的な対策に繋がっています。

【おわりに】

今回紹介させていただいた活動以外にも、地区の青少愛育運動協議会や生涯学習推進委員会主催の夏祭りや餅つき大会への参加・協力等、地域の各種団体と連携しています。公民館の夏祭りでは、園児がおみこしを担ぎ、リズム等を披露しています。また、保護者はお祭りを盛り上げるために各種団体と協力して屋台を出店しています。地域の子供たちの健やかな成長のために様々な行事や活動に取り組んでいます。今後も幼稚園生活を通して“生きる力”を育み逞しく成長していくためのサポートができるＰＴＡでありたいと思っています。

『親子交通安全教室』　交通安全部主催

〈交通ヘルパーによる交通安全教室の実施〉

〈雨天時の傘のさし方の練習をしました〉

『広幼祭り』は、有志の保護者による参加・計画

〈ヨーヨー釣りやストラックアウトや輪投げなど保護者が考えたゲームコーナーでお祭りを楽しみました〉

〈地域の祭りのオープニングセレモニーに参加し大声援を受けました〉

〈保護者は祭りでお店を出店しました〉

●徳島県　海陽幼稚園　活動紹介

保護者･地域･幼稚園のつながりで「かいようっ子の笑顔満開」

園長　元木　千夏

この度、令和６年度優良PTA文部科学大臣表彰を頂きました。このような名誉ある賞を受賞することができましたのは、歴代PTA役員・会員の皆様の努力と地域の皆さまの温かなご支援のおかげだと感謝しております。

本園は、徳島県と高知県の県境にある海陽町の幼稚園で、海・山・川と自然豊かな環境の中にあります。海陽町には世界初のDMV（デュアル・モード・ビークル）が走り、幼稚園からも毎日運行が見られます。海陽町唯一の幼稚園であるため、地域の方々も協力的で様々な行事に参加してくださっています。

現在園児数は４・５歳児22名です。PTAでは、幼稚園で行う活動の協力､PTA主催の活動､地域の方との活動など様々な活動に全保護者が会員となり参加しています。役員は各学年３名ずつ出ていただき計画を立て運営していますが、役員の負担軽減に努め、全会員が子どもたち・幼稚園のために積極的に協力しています。

海陽幼稚園のPTA活動の一部を紹介します。

○夕涼み会

夏休み前に、PTA主催で行っている夕涼み会。コロナ禍は園児対象だけのお祭りを開催していましたが、今年は久々に地域の方も参加できる祭りが開催できました。

会員の協力だけでなく、地元の高校生のボランティアさんを募ると20名も参加してくれて、待ち望んでいた卒園児や地域の方々にたくさん参加してもらえました。焼きそば販売やくじ引きなどのお店、高校生の太鼓の演奏・阿波踊り連の参加など以前のように活気あふれる祭りとなりました。地域の方々には、幼稚園児のかわいい様子や園の様子も見ていただけ、温かな雰囲気でした。初めて参加した会員さんも、「たのしいお祭りですね。来年は店番手伝うね」などやるきになる方もおいでました。久々に開催して、地域に根ざした幼稚園の祭りだなと思いました。

「夕涼み」とうたっていますが、夏の暑さがすごく、役員さんはさっそく来年度の時期について考えてくれて、改善するところを見付けていました。とても心強い会員さんです。

○親子遠足【町探検】

本園は２年保育を行っているので、２年間のうち１度は汽車やバスを利用して出かける遠足、１度は海陽町内を親子で町探検ウォークラリーとして行っています。

今年は町探検をしました。チェックポイントは役員と話し合い、子どもたちの幼稚園生活で関わってくださっている方々の場所に設定しようとなりました。給食にパンを提供してくれているお店・移動図書館車で月２回幼稚園に訪問してくれている図書館、みんなの書いた手紙を届けてくれる郵便局など町内13か所設定し、当日３班に分かれて回りました。

役員が班のリーダーをしてくれながら、保護者同士が協力してルートを確認しながらどの班もワイワイ楽しそうに町探検をしていました。町の方々も、声を掛けてくださり子どもたちは嬉しそうにスタンプ帳を見せたり、保護者は地域の方が子どもたちに接してくれる様子を見ながら話をしたり、秋晴れの中気持ちの良い時間を過ごせました。２時間30分で３班ともゴールができ、スタンプ帳や各場所でもらった景品を嬉しそうに見ていました。

保護者は町探検中に会えなかった班に「どのルートでいったん」「そこに道があるんやね」と自分たちの知らないルートを確認していました。また、子どもたちがしっかり歩けることや幼稚園で園外保育に出て様々な場所を知っていることに驚いている保護者もいました。地域の中の幼稚園であることを確認でき、子どもの成長を感じられるこの町探検は大切なPTA活動になっています。

○廃品回収・ベルマーク活動

本園では、PTA活動として年間４回の廃品回収事業を行っています。統合する前から行っていた活動で25年以上続いています。保護者は年間２回参加としていて、土曜日に園の駐車場で行っています。役員が回収場所を記入した用紙を見ながら、車で回収に行く方・地域の方々が持ってきてくださった物を受け取る方と役割分担で行います。リサイクル活動で地域貢献をしながら、保護者同士は話をしながら情報交換ができ、地域からも保護者からも今後も続けてほしい活動になっています。そのためにも園で行っていることや地域とつなが

りを深め協力していただける幼稚園であり続けたいと思っています。

保護者の活動を見て、子どもたちも回収したペットボトルのキャップを選別したり、ベルマークをマークごとに分けたり、SDGｓな活動に繋げています。園生活でも給食の牛乳パックを洗って開いてほして廃品回収に出していて、卒園後の小学校でも続けて行っていて、廃品回収に協力していただいています。

子どもたち・保護者が自分たちの毎日の行動が、環境問題に繋がると感じ、考えるきっかけになっているからこそずっと続いている活動なんだなと思います。収益はPTA活動に利用し、人形劇団を招いたり、音楽会を行ったり、子どもたちの生活を豊かにする活動に利用させていただき、保護者や地域の方にもご案内を出して来てもらっています。

この他にも、子どもの安全を守るため地域の方に指導していただき防災頭巾作りを行ったり、地域の方に染め物（藍染め・あかね染め）を指導していただいたり、地域の良さを感じる活動をたくさん方々やPTAさんに協力いただきできています。

子どもたちはこの海陽町で今後も様々な方に出会い、体験を通して学んでいくと思います。そして、子どもたちも自分の町を知り、町の一員として、幸せに暮らしていくと思います。

たくましく育っていく子どもたちが笑顔満開で幼稚園生活を送っていけるよう、今後も保護者・地域・幼稚園がつながっていけるよう協力していきたいです。

全国国公立幼稚園･こども園
ＰＴＡ連絡協議会章

第63回全国国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ全国大会

岩手大会ご案内

大会主題　いきる力を育み　わかり合い　てをつなぎ合う　こどもたち

期日　令和７年８月９日(土)･１０日(日)
場所　アイーナいわて県民情報交流センター
盛岡市民文化ホール(マリオス)

後援：岩手県

第63回全国国立幼稚園・こども園PTA 全国大会いわて大会実行委員長の岩渕弘喜と申します。会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げますとともに、日頃のPTA活動へのご理解とご協力に心から敬意を表します。

さて、いわて大会は「いきる力を育み　わかり合い　てをつなぎ合うこどもたち」～復興に取り組み、お互いを幸福に守り育てる希望郷いわて～を大会主題に令和７年８月９日（土）・10日（日）に岩手県盛岡市にて開催いたします。平成23年には東日本大震災が発生し岩手でも多くの被害にあい全幼Pや全国園長会からの支援金や全国各地からの温かいご支援を受けました。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。東日本大震災を経験し日ごろからのPTA活動「人と人とのつながり」を改めて実感しました。幼児期の子供たちにとって、最も大切な「人と人とのつながり」が薄れつつある今こそ「心の教育」の必要性が求められていると思います。

「幼稚園・家庭・地域」との連携を深め、次代を担う子どもたちが幼児期から心豊かにたくましく「生きる力」を身に付けられるよう保護者であるわたしたちこそ自らが学んでいかなければいけないと思います。

岩手大会では、みなさまが人とのつながりを通じて得られるものを存分に感じていただけるような大会になればと思っています。

そして、開催地岩手県盛岡市といえば盛岡三大麺があります。１つ目は「わんこそば」２つ目は「盛岡冷麺」３つ目は「盛岡じゃじゃ麺」みなさんご存じでしょうか。今年度８月に開催されました香川県の「うどん」次は盛岡三大麺がお待ちしております。そのほかに、2023年にニューヨーク・タイムズ紙に「行くべき52カ所」に、イギリスの首都ロンドンに続く２番目に盛岡市が紹介されました。中心市街地には歴史的な建物と川や公園などの自然があり、まちを歩いて楽しめるところなどの文化が根付くまちであることが評価されました。

また、岩手県といえば日本で二番目に大きな都道府県として知られています。世界遺産「平泉」「御所野遺跡」沿岸部三陸沖は、世界三大漁場のひとつとして、豊富で新鮮な海の幸に恵まれています。

是非、自然豊かな岩手、復興に取り組む岩手で魅力あふれる観光スポットもグルメも満喫して頂き、心も体もリフレッシュしていただけたらと思います。

最後の地方大会として、全国の皆様のお越しを心よりお待ちしております。

令和６年度 顧問・役員のご紹介

顧問

猪木　直樹（前全幼Ｐ会長）
上枝　秀則（元全幼Ｐ副会長）
今井　昇（元全幼Ｐ副会長）
太田　禎彦（元全幼Ｐ副会長）
大関　敏寛（前全幼Ｐ副会長）
新司　英子（前全幼Ｐ事務局長）
酒井　幸子（元全国国公立幼稚園長会会長）
岡上　直子（元全国国公立幼稚園長会会長）
池田多津美（元全国国公立幼稚園長会会長）
荒木　尚子（元全国国公立幼稚園長会会長）
岩城眞佐子（元全国国公立幼稚園・こども園長会会長）
関　美津子（元国国公立幼稚園・こども園長会会長）
新山　裕之（元全国国公立幼稚園・こども園長会会長）
箕輪　恵美（前全国国公立幼稚園・こども園長会会長）
高橋　慶子（全国国公立幼稚園・こども園長会会長）
深町　芳弘（元全国国公立幼稚園長会事務局長）
楚阪　博（前全国国公立幼稚園長会事務局長）
佐藤　忍（全国国公立幼稚園・こども園長会事務局長）

役員

会長　山﨑　篤史
副会長　岩渕　弘喜
〃　中川　博喜
〃　森瀬　忠克
〃　谷村　利貴
〃　野々村　卓也
〃　紫和　恵理子
〃　清松　督雄
〃　森山　未来
特任理事　吉田　尚
〃　永瀬　義剛
監事　黒木　愛子
〃　河田　明子
〃　千葉　敏之